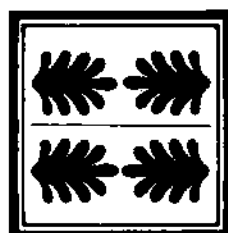


男の市場 (下)

黒岩重吾





講談社文庫

男の市場(下)

黒岩重吾

昭和56年1月15日第1刷発行

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽2-12-21

電話 東京 (03)945-1111(大代表)

振替 東京 8-3930

デザイン 亀倉雄策

製 版 豊国印刷株式会社

印 刷 東洋印刷株式会社

製 本 株式会社千曲堂

© Jugo Kuroiwa 1981

Printed in Japan

0193-316664-2253 (0) 定価380円

(落丁本・乱丁本はおとりかえます)

男の市場(下)

黒岩重吾

講談社

目次

男の市場
(下)

解説
年譜

尾崎秀樹

二九八 二六九

五

男の市場
(下)

ホストの習慣

一

古城は高江の身体から離れるとベッドに坐ったまま高江を眺めた。帯を解いた高江は相変らず仰向けに寝たまま情のこもった眼で古城を見詰めている。腰紐だけのそういう女の姿は自堕落な感じがした。寝転がった中年女は、太っていればいるほど、首から頬の辺りの脂肪がふくれたように感じられる。身体を起しておればそうでもないのに、寝ると一層、年が感じられる。

今のように顔を見下ろしている場合はことにそうであった。この女は特別なのだ、俺がいつも寝ている客ではない、と古城はふと自分にいい聞かせた。だがそれは何の役にも立たない。

特別な女というより、客のような気がするのだった。古城が初めて知った女とは、何の関係もなかった。あの高江と眼の前の女とは別人である。ということは、古城にとって、高江との初めての関係は、何の意味も持っていないということになる。

もし高江が、古城のそんな気持に気付かずに、思い出に縋っているとしたなら滑稽だった。いや、高江のような女が、思い出に縋ったりはしないだろう。口ではそういつているが、内心では、それを、安積への裏切りの理由にしているのだ。

客のように思った時から、古城は冷静になった。問題は、高江の欲望を満足させた時、代価として、何をいただくかであった。

高江は小遣いを出したりはしないだろう。

お前が無料で俺に抱かれると思ったら、大間違いだぞ、と古城は胸の中で呟いた。

「バスに入りませんか」

と古城はいった。

「ええ、その方がいいわ」

高江が両手を差し出したので、古城はその手を取り、高江の身体を起した。重たかった。その重さが、古城をいつそうんざりさせた。

古城は習慣になつてゐる言葉を告げた。

「一緒に入りましょうか、背中を流します」

すると高江は古城を睨んだ。

「隆二さん、あなたのお客にするようなことを、私にしないで頂戴……」

まずいことをいったな、と古城は思った。商売で習慣になつてゐるが、普通の男性ならそんなことはしないのだ。高江は、流石さすがに古城の言葉を情とは取らなかつた。

反対に事務的なものを感じたのかもしれない。

「そんな積りでいったんじゃありません」

と古城は弁解した。

古城はとまどいを覚えた。この年齢の女と、仕事を離れて付合つたことがない。

それだけに一個の男性として、どう扱っていいのか、判断が付き兼ねた。動作の一つ一つが、商売として身につけてしまっているのだった。古城はベッドから離れると、ソファに坐った。高江の気の向いたようにやらせるより仕方がない。

「隆二さん、お風呂は？」

「僕はもう入りました……」

「それじゃ、私入るわ、待っていてね」

女客とホテルに行った場合は、大抵、客が先に入る。そういう点も、普通の男女関係とは違った。客の中には稀れに、古城に、先に入って欲しいという者もいたが、それは例外である。この時とばかり、客は先に入るのだった。客が脱ぐ服や着物を、古城がハンガーに掛けてやることも多い。

大体、男が浮気でホステスとホテルに行ったような場合は、自分が脱いだ服を女に触れられるのを嫌がるようだ。

ところが、ホストと浮気する女客は平気なようであった。

こういう点にも、女性の隠された面が現われている。

古城は高江の着物には手を触れないことにした。高江は、自分は古城の客とは違うのだ、という意識がある。その高江の感情を壊してはならない。

もっと高江の気持ちに密着せねばならない。

古城はベッドに入って高江を待った。高江はバスから出ると長襦袢を着て鏡の前に坐った。古城は煙草を吸った。

「ね、隆二さん、あなたに会うなんて本当に不思議ね、よくよく縁があったのね」

「そうですね、僕もそう思いますよ」

「私は、高利貸の女で、あなたはホスト、何かドラマにでもなりそうじゃないの」

高江の感じ方には、古城は驚いた。

しかし、そういわれると、確かにそうかもしれない。ただ、そのドラマが美しいものでないことは確かだった。

「人生はドラマですよ」

「本当ね、私、安積の女になってから、浮気などしたことないのよ、お店を大きくすることに夢中で、それにね、隆二さんのように、安心出来る男が現われなかったの、私を口説いた男は多いわ、でも、どんなに魅力のある男も、おなかの中に何か隠しているようで、その気になれなかったわ、本当に、我慢していて良かったと思うわ」

「僕だって、ホストになってから商売抜きで付合った人は、いなかったですよ」

「本当、私の場合は、商売抜きなの」

「本当ですよ、だいいち、僕の部屋に女性を入れたことがありますよ……」

「そう思うけど」

高江がベッドに入ってきた。

それからの古城の動作は、客との場合と同じだった。特別な女だからといって、そんなに変わった方法があるものではない。

高江も客と同じように燃えた。高江の燃え具合から見て、安積以外の男が、高江にあるように

は思えなかった。それほど高江は自分の情欲に溺れた。古城のことよりも自分の満足に夢中になった。愛とか、思い出などというものは、高江の欲望とは何の関係もない、ということを古城は感じた。古城は益々、冷静になり、技巧の限りを尽すことが出来た。

ことが終ると、高江は、

「不思議だわ、隆二さんがこんなになるなんて、私なのよ、あなたの初めての女は……」

「そうですよ」

「そんないい方は止して、まだ客と思っているのね」

「そんなこと、思っていないよ、それじゃ、自由に話すよ」

「そう、そうして、煙草頂戴」

高江は旨そうに煙草を吸った。煙を眺めているのだろうか。酔ったような眼だった。

「高江さんは、安積とはずっと付合う積りなの」

「今のところはね、あの旅館をホテルにしまったら、これ以上安積の女でいる必要はないわ、仕事の方も安定するし」

「しかし、安積が、あなたを離さないだろう」

「金銭的にも色々と絡み合っているしね、でも大丈夫よ、その時は、隆二さんも、ホストなんかやめて、店でも持ったらどう……」

古城は洋装店を経営する積りだ、といった。そのために、一生懸命、金を溜めているのだ、と告げた。

「もうだいぶ溜ったの？」

酔っていたような高江の眼が、醒めて来たのを古城は感じた。

「まだただけど、兎に角、もう二年位ホストをして、それからだ」

「ホストって、相当の収入になるの？」

「今だと、月に二十万は貯金出来る」

「二十万ね、三年で、利子を入れて七百五十万ね、もうその位溜めているの？」

利子を入れて、というところなど、如何にも高利貸の女らしくて、古城は苦笑した。

「その位になるかな」

「ね、私がホテルを始めたら、ホストをやめなさいよ、千万位のお金なら貸してあげるわよ、隆二さんだもの」

高江は思い切ったようにいった。

「僕は自分一人の力で資金をつくりたいんだよ」

そういうながら古城は腹の中で、冗談じゃない、と呟いていた。千万円をくれるというのなら話は別だが、貸すというだけで、俺を縛ろうというのは厚かましい。

「でも事業というのは、一人の力ではなかなか無理よ、私が安積のような男の女になったのも、一人じゃ無理だと思ったからよ」

「女の場合はしょうがないがね……」

古城はふと眠気を覚えた。

高江に泊られてはたまらない。古城はバスに入ると身体を洗った。

「高江さん、安積が電話したら危険だよ」

「そんなことはないけど、もう何時？」

高江は漸くベッドから下りた。

二

二日ほど古城は真直ぐ家に戻った。誘う客があったのだが、億劫だった。そういう点で、古城は矢張り自分の身体に限界を感じる。

ホストなどという仕事は矢張り二十代、それも二十五歳までのものだと思う。

女と関係を持ったその翌日は、総ての客がわずらわしくてならない。店内でサービスするのがせい一杯であった。

村木はまだ擱らない。何処でどうしているのだろうか、とふと思う。村木が事件を起してから広川は、古城と話をするのを避けているようだった。席が一緒になることもあるが、自分の方から古城に話しかけることはなかった。古城は広川を追及する気にはなれなかった。村木を可愛がってはいたが、所詮ホストとしての付き合いである。

友達でも、何でもない。仕事の上で利用し易い相手だったから、利用していたに過ぎない。広川が責任を感じて古城を避けている以上、そつとしておいた方がいい、と古城は思ったのだった。広川は何といっても店では実力者だし、広川とトラブルを起すのはまずい。

だがその夜、帰り支度をしていると、広川の方から声を掛けて来た。

「古城君、一度、僕の店に遊びに来てよ、色々面白いこともあるよ」

「有難う、機会があったら、一度寄せて貰いますよ」

「今夜はどう、僕が招待するけど」

「今日はちよつと……」

と古城は笑った。

別に約束はなかったのだが、あるように匂わせたのだった。

「それなら、今度は是非ね、それはそうと、村木どうしているかな」

と広川は呟くようにいった。

「どうせ逃げ切れないんなら、自首して出たらいいのにね、馬鹿な男だ、あんな馬鹿だとは思わなかった」

すると広川は、意味あり気な微笑を浮べて、もし村木が生活に困って、何処かに勤めるとすると、ゲイバーに違いない、というのだった。如何にも広川らしい推理だった。

「村木には、その気があつたからね、顔を整形して、必ず勤めるよ、古城君は、何も聞いていなかったの？」

どうやら広川は探りを入れているらしいのだった。村木が古城に、何か話していないか、と不安に思っているようだった。

古城は、村木にそんな素質があつたの、と驚いた顔をしてみせた。村木が広川の紹介で、ホモの相手をしたというのは、古城の推測で、何も証拠はない。

古城の答えを聞いて、広川は安心したような顔になった。

広川は何のために古城を誘つたのか。

古城がどれだけ知っているか、探りを入れるためだろうか。それにしても、面白いことがあ

る、というのが、ちよつと気になった。

翌日の昼、晶子から古城に電話が掛けて来た。晶子の声は、はずんでいた。

「古城さん、あなたのいう通りだったわ、高木に到頭白状させたの、彼ね、尾行している最中園子に見付かって、問いつめられたんだって、それで、もう駄目だと思って、私にいい加減なことを報告していたのよ……」

そういつている晶子の声が明るかったので、古城は微笑が湧いて来た。晶子は、園子の調査をゲームのように思っていたのかもしれない。

「そうだと思っていたよ、尾行調査などというものは、専門家でも難しいんだよ」

「じゃ、専門家の私立探偵に頼もうかしら」

「それも一つの手だとは思うが、一度そういうことがあったのなら、用心していると思うな、それに、その高木という男、君に頼まれた、と、喋っていないかい」

「それは大丈夫らしいわ、彼だってそこまで私を裏切ったりはしないわよ」

晶子は、今夜会いたい、というのだった。古城と初めて会ったクラブに行っているという。古城は迷った。晶子に会うのは楽しいが、今夜あたり、稼がねばならない。

「店に電話してくれないか、十一時頃」

「じゃするわ」

と晶子は電話を切った。

晶子の声を聞くと清涼剤を飲んだような気がする。男性には燃えないレスの女なのに、さわやかな感じがするのは、どうしたわけだろう。余りにも、古城の生活が泥にまみれているせいかも